令和元年度　大津市立和邇小学校学校評価書

【評価】 3:よくできた　2:できた　1:あまりできなかった　0:まったくできなかった

項目			自己評価			学校関係者評価		今後の学校改善に向けて
			小項目評定	中項目評定	現況	中項目評定	意見・提言等	
深い学び 主体的・対話的で	1	支持的風土を育てる学級・学年集団づくりを進めた。	2	2	・コミュニケーション能力の向上に向け、班やグループでの話し合い活動に積極的に取り組んでいる。また、言葉だけでなく図表や実物を用いて説明したり、話し合ったりすることができた。 ・校内研究のテーマとして、豊かな心を育む授業づくりを学校全体として目指したことで、お互いの良さを認め合うような学級作りを共通してどの学級でも実践できた。 ・各教科、総合的な学習の時間での活動を通して、児童が「自分らしさ」を表現できるように、発問、板書、授業の流れを工夫してきた。主体的に学ぶ姿が見られるようになってきた。	2	・対話型学習がしやすい座席配置が工夫されていてよかった。 ・コミュニケーションが取りにくい児童に対してＩＣＴの活用が有効とはならないか。 ・児童が積極的に発表できるような雰囲気づくり仲間づくりを心がけてほしい。	・教員が一人一回の研究授業を行い、相互に参観・協議を行うことで、授業力の向上に継続して努める。 ・児童が「めあて」と見通しをもって授業に主体的に臨み、「まとめと振り返り」まで確実に行える授業を実施する。 ・児童がさらに主体的に学習に取り組めるようにするために、協同学習での役割を与えたり、良質なコミュニケーションを促したりしながら、工夫改善に努める。
	2	協同する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善に努めた。	2					
	3	主体的・対話的で深い学びを追求する授業研究や研修に取り組んだ。	2					
道徳教育の充実	4	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる指導を工夫した。	3	2	・道徳科の授業以外でも、クラスでもめたことやきまりについて、「なぜ守らないといけないか」など、クラスで考え、意見を出し合ったりする時間を大切にしている。 ・「いじめはあってはならない」ことは、（子どもたちの口からも出るように）意識として徹底されている。 ・保護者や地域の方に、どの学年も年に１回道徳科の授業を公開している。 ・道徳科での学びが実生活に今ひとつ生かせていないことは課題である。	2	・校内でも研究されているようだが、道徳的な高まりを求めることはすばらしいことである。 ・道徳科の公開授業を１回ではなく、もっと増やしてはどうか。 ・教科に変わるので、更なる教材開発、研究に励んでほしい。	・「考え、議論する」道徳科の授業をめざすためには、単に価値項目を理解することだけではなく、人権意識の向上や自尊感情の高まり等にも意識を向ける。 ・評価に関しては、個人が研修等で学んだものを職員全体に返せるように校内研修会を開催する。 ・各学年で重点教材を開発したり選定したりし、それを学年間で共有ができるように教材研究を深めていく。
	5	道徳科の授業・評価に関する研究や資料の開発・整備・交流に取り組んだ。	2					
	6	積極的に保護者等への道徳科の授業公開を行った。	2					
体力づくり	7	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善に努めた。	2	2	・運動会等体育的行事では、子ども第一に何度も話し合いを行い、昨年度の反省をふまえよりよいものにすることができた。 ・体育の宿題やランランラン月間、なわとび大会への取り組みなど、休み時間や家庭においても運動に親しむ環境づくりができた。 ・体育授業や体育行事については、積極的に子どもたちの体力を向上させる体制がとれた。その反面、社会の風潮やケガの防止の観点から、取り組みたくても取り組めない活動が多いように感じている。	2	・幼少期の運動能力が二極化されている。体を動かすことが好きになる取り組みを実践してもらいたい。 ・運動に対し、目標を作って、長続きするようにすれば、自ずと体力、能力が高まるのではないか。	・子どもたちが自発的に動けるよう、子どもたちの手（委員会活動等）で企画や運営をさせる機会を多くしていく。教師は、子どもが運動に親しめるようにサポートする。 ・保護者の見守りやふれあいボランティアの方々に募集をかけ、休み時間にも積極的に子どもたちが体を動かし、遊べるような環境を作る。 ・子どもたちが苦手な鉄棒や跳び箱、幅跳びなど時期を合わせて、研修をする。
	8	運動に親しむ環境づくりや体力づくりに努めた。	2					
	9	体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲を育てた。	2					
指導改善	10	学力向上を目指した指導体制・指導方法の工夫改善に努めた。	2	2	・全国「学力学習状況調査」や県「基礎チャレンジ」のデータを元に学力向上にむけての校内研修会を３回実施し、授業改善につなげることができた。 ・基礎学力向上に向けて、ぐんぐんタイムで「国語」と「算数」の「１００文字作文」と「基礎計算問題」に取り組み、こつこつと力をつけている。 ・タブレットを使った授業を取り入れたり、キャリア教育を進めたりして、新しい風が和邇の教育の中に浸透してきている。また、プログラミング的思考を身につけさせるために、WEDO2.0を活用したり、フローチャートを使って考えさせたり、指導方法の工夫に努めた。 ・４月の家庭訪問、１学期末の通知表（所見部分）を廃止した。これにより、事務作業や保護者対応が軽減された。	2	・教職員の自己管理や心の安定が児童に伝わる。余裕を持って指導にあたってほしい。 ・スクールサポーター制度等、利用できる制度は活用してほしい。 ・働き方改革は、意識改革が必要である。見通しを持って、職務に臨んでほしい。	・「和邇小スタンダード」を作成し、学習・生活の両面から、当たり前（の行動）を徹底する。 ・各学力調査、テストのデータ比較や考察等を深めるために、学力向上委員会を密に開催し、子どもの実態に合った授業改善に努める。 ・ＯＪＴを計画的に実施し、若手教員のスキルアップにつなげる。また、メンター制度を利用し、中堅教員が指導に当たる。 ・教師の得意分野を生かし、組織的に学力向上に取り組むために高学年における一部教科担任制の実施に向け、研究・研修を積み重ねていく。 ・更なる会議時間の短縮化、仕事内容の減量化（簡略化、削減）、仕事量を均等に分散させるように分掌を熟考する。
	11	教職員の指導力及び組織的な教育力の向上に努めた。	2					
	12	働き方改革の取り組みと教育活動の質の改善に取り組んだ。	2					

項目				自己評価			学校関係者評価		今後の学校改善に向けて
				小項目評定	中項目評定	現況	中項目評定	意見・提言等	
育ちと学びを支える連携	家庭・地域との連携	13	保護者に対して、子育てに対する支援や研修会を行った。	2	2	・１０月には、希望者による「保護者自由懇談」を実施し、多くの保護者と子どもの生活や学習等について話し合うことができた。 ・たくさんの地域の方々が子たちを応援してくださり、見守っていただいている。わにっこ（総合）等と関連させながら、地域に根ざした良い取り組みができている。特に、ふれあいボランティアの方々による学校支援は、本校の自慢であり、他校の手本となる取り組みである。 ・防災教室を行い、普段から子どもたちが「安全・防災」を意識できるように授業を展開した。 ・ＰＴＡ講演会や保護者ＣＡＰ研修、学校保健委員会など、保護者に対する研修会を実施しているが参加者が少ないことが課題である。	3	・子育てに関して、幼児期の核は父親であってほしい。父親の意識向上を望みたい。 ・ふれあいボランティアを軸とした地域交流は効果が高く、安定的に実践できている。継続したい。	・保護者対象の研修会を魅力ある内容にした上で、ＰＴＡと連携し、案内や報告等の広報活動を充実させ、参加者を増やしていく。 ・「総合的な学習の時間」「生活科」の取り組みをモデルチェンジし、現在進めている縦横のつながり、系統性を注視する。 ・学校地域活動推進員と協力し、新規の地域人材・地域教材の発掘と推進に力を入れていく。 ・地域の学校として、実際に和邇地区で地震など起きた場合、どのように地域連携していくか、学校運営協議会を中心に議論を進める。
		14	保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会、研修会の実施、地域人材の活用に努めた。	3					
		15	防災教育の推進と安心・安全な学校づくりを進めた。	2					
	保幼小中の連携	16	子どもの校種間交流や教員の出前授業等、積極的な連携に努めた。	2	2	・新しく異動してきた職員が夏休みを利用して、保育現場を実際に体験したり、全職員で合同研修したりしたことは、就学前教育の実際に知ることができる良い機会であった。 ・今年度は、昨年度に比べ、幼稚園の出前授業の回数が増えた。また、保育園に関しては、昨年度出前授業ができていなかったが、今年度は２回できた。出前授業を行うことで、年長児に名前を覚えてもらえるのはメリットである。 ・１年生児童と年長児の交流の機会を増やした。 ・校区研究会を軸に、保幼小中で交流できた。各校園の授業実践や生徒指導等を参考にしながら指導することができた。	3	・保幼とは違うカリキュラムなので、入学当初は戸惑う児童が多いようである。円滑な接続を期待する。 ・５５（５年生と５歳児の）交流を始めると聞いた。ぜひ実施してもらいたい。	・次年度に向けて、保幼小連携会議で、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを設計している。なめらかな接続となるよう準備している。 ・次年度は、年数回の５５交流を新規事業として計画している。１年生だけでなく、高学年も交流していくことにする。 ・本校からの幼稚園、保育園への出前授業は充実してきたが、中学校からの出前授業が年間１回では少ない。各学期１回程度の出前授業が実施できるよう連携を深める。
		17	校種間の授業公開や合同研修会や教育内容等の交流に努めた。	2					
		18	保幼小の接続期の教育課程の編成等、校種間のカリキュラム研究に取り組んだ。	2					
組織体制の充実	生徒指導体制の充実	19	いじめや暴力行為、不登校等生徒指導上の諸課題の早期発見、日常的な予防指導に努めた。	3	3	・いじめは絶対にしてはいけないと日頃から指導している。また、子どもたち自身からも「いじめは絶対にいけないことだ」という意識があることが分かる。 ・全職員が早期発見、早期対応を心がけることができていた。問題が起こった際には、必ず複数で対応ができた。 ・いじめや問題行動、不登校傾向等に関して、生徒指導部を中心に組織的にかつ臨機応変に対応することができた。 ・いじめ対策担当より、ＰＴＡ総会やニューズレターでいじめとは何か、大津市としてのいじめの捉え方を保護者や地域に発信することで、共通認識が昨年度よりも高まってきた。	3	・児童の様子や取り組みの様子を見ていると指導体制は充実しているようである。 ・不登校児童に対する初期対応には十分気を配っていただきたい。 ・ふれあいパトロールや見守り隊等、少しでも役に立てれば、という思いで取り組んでいるところである。	・毎月実施の「生活アンケート」を継続し、結果をもとに指導や教育相談を行い、解決を図る。また、年２回の「いじめ防止強化月間」に合わせ、標語・学級宣言文・個人の意見文を作成・掲示し、個々の児童の意識を高める。 ・教育委員会（児童生徒支援課等）や教育相談センター等の各関係機関との連携は取れているが、地域の民生委員児童委員の方々ともさらに連携を深めていく。 ・あいさつの指導に重点を置き、学校や家庭、地域であいさつできる子を増やすために、児童会と連携し活動する。
		20	生徒指導・教育相談体制を確立し、組織的に推進した。	3					
		21	家庭・地域・関係機関との連携による指導に努めた。	2					
	特別支援教育の充実	22	個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成と活用に努めた。	2	2	・特別支援コーディネーターを中心に、校内体制の充実に努め、関係機関との連携を積極的に推進することができた。 ・個別の教育支援計画の作成にあたって、担任と保護者の思いを摺り合わせながら立案することができた。また、前年度の個別の指導計画を参考にしたり、交流学級担任と話し合ったりして、個別の指導計画を作成することができた。 ・該当関係機関と連携し、中学進学や将来の展望等に活かすことができた。	2	・特別な支援が必要な児童には、計画的な支援をお願いしたい。 ・休業中の「寺子屋」等に、みんなで楽しく参加してもらっている。地域でも見守っていきたい。 ・学校生活支援員の支援が行き届く体制を継続してもらいたい。	・教育相談センターの巡回相談やSC、SSWを有効活用し、連携、協働を深めていく。 ・自分の授業や指導の幅を広げる。できない気持ちやできない要因を理解するように努める。 ・教師が一人で抱え込まないで、支援を求めやすい校内体制を築いていく。また、全ての教職員が、協働する仕組みを理解し、参画、活用する意識を高める。 ・「学習環境」「学級経営」「組織支援」等のチェックリストを作成した。これらを活用し、通常学級の教師も基本的な支援方法を研修する。
		23	組織的・計画的な特別支援教育体制を確立した。	2					
		24	関係機関と連携した相談体制の充実に努めた。	2					
学校満足度		25	児童は学校に満足している。（アンケート結果より）	3					